



国際交流員の活動日誌

vol.75



6月21日は夏至で、年中最も昼が長い日です。この頃は日の出がとても早く、夏時間を使用している国で育った僕にとっては、朝3時半ごろから外が明るくなる事が睡眠不足の原因になっていました。ある早朝、どうしても眠れない僕は、窓の外の美しい景色を見て、「もう、散歩すつべし！」と言って歩き出しました。

そのときは思いつきでしたが、去年の夏から朝の散歩が習慣になりました。一日中市役所の椅子に座る日があり、健康が心配になっていましたし、一日屋内にいるのも精神的に辛く、出勤前に自然の中で体を動かすことが必要とわかったからです。今では隣の水田や桃畑の間を歩き、体心も立て直しています。

毎日散歩するわけではありませんが、多くの朝に散歩することで、四季の農地の景色の流れや、住んでいる地域との馴染みをより感じ、結果としてこの一年間は僕の伊達市在留で最も豊かな一年になったと思います。それだけでなく、散歩している間、深く考える事ができるので、自分の事、そしてどうしたら自分が地域や日本の社会の役に立てるのか、見えるようになってきました。

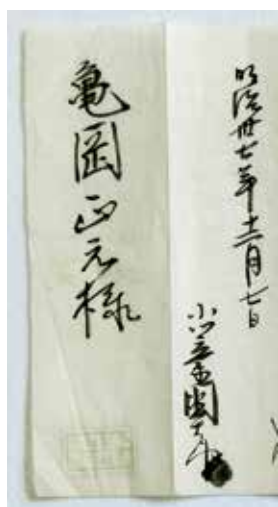
伊達市在留の最後の一年間、朝の散歩は、僕の人生の歩みも進めてくれたかもしれません。

(トニー)

地域の魅力 ふる里再発見

もんじょ 文書資料からわかる 亀岡家住宅

令和5年度第1回企画展
亀岡正元家文書の世界
6/17^④から
伊達市保原歴史文化資料館



國太郎から
亀岡正元宛ての書簡
(伊達市保原歴史文化
資料館所蔵)

国指定重要文化財の旧亀岡家住宅は、明治37(1904)年頃に桑折町伊達崎に建てられました。その後、昭和60(1985)年に建物や文書群が当時の保原町に寄贈されました。その後も数回にわたり資料が寄贈されており、現在は歴史文化資料館に収蔵されています。この中に住宅の建築に携わった小笠原國太郎おがさわらくにたろうからの書簡があります。

國太郎からの書簡は8点が保管されており、大半が賃金の請求です。明治35、37年までの請求書を読み解くと、棟梁のほか、18人の職人が建築に従事していたことが確認できます。また、残されている請求書は明治37年12月7日付のものが最後で、これは旧亀岡家住宅の完成時期とほぼ同じと考えられます。

このように、文書資料を調査することで亀岡家住宅の完成時期が推測できたり、建築に関わる職人たちの様子が想像できたりするところが、おもしろいところです。

6月17日^④から開催する企画展では、これらの文書資料も展示します。